千姫

（上）

村上元三

千　　姫（上）　　河出新書

昭和30年12月20日　第1刷発行　　¥ 100

著　者　村上元三（むらかみ げんぞう）

東京都千代田区神田小川町3—8
発行者　河出孝雄

東京都千代田区飯田町1—23
印刷者　中内佐光

発行所　東京都千代田区神田小川町3—8　株式会社　河出書房

暁印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

小説

千姫

〈上〉

●

村上元三著

河出新書

著者略歴

明治四十三年三月、朝鮮元山にて生る。
本名、村上元三。東京青山学院中等部卒業。
サンデー毎日大衆文芸に入選し、作家を志す。
長谷川伸の新鷹会、二十六日会会員となる。
昭和十六年「上総風土記」によって直木賞を受く。戦後、朝日新聞夕刊に「佐々木小次郎」を連載し、戦後はじめての新聞紙の時代小説として好評あり。
主な作品としては前記のほかに「千姫」「天馬往来」「次郎長三国志」「新選組」「ふらん亭物語」「風流あじろ笠」「加賀騒動」「源義経」「颶風の門」などがある。

目次

あいびき……六
星の約束……九
手鞠会……一三
小野のお通……一八
十二段草子……二二
五彩の船……二六
淀君……三二
肥後の虎……三四
笹の丸御殿……三八
めくり骨牌……四〇
流浪の旅……四三
箱根むすめ……四七
風の便り……五四
家康江戸へ……五七
突風……六一
ひろがる雲……六六
母情……七〇
温室の花……七五
御座船……七九
空也念仏……八四
大盗勾坂甚内……八七
二条城対面……九三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大仏建立……九七
九年の恋……一〇一
黒い影……一〇五
目ざめ……一〇八
黄金の太刀……一一三
東の間の……一一八
娘ごころ……一二〇
盗賊双六……一二五
秀頼の怒り……一二八
鐘銘問題……一三三
風雲……一三八
その前夜……一四三
甚内の商売……一四五
密使……一五〇
お通の焦慮……一五四
取引……一五九
堺襲撃……一六三
冬の陣前夜……一六八
背く心……一七二
片われ月……一七七

千姬〈上〉

あいびき

久美は、十四歳であった。

人の眼のとどかぬところで男と忍び会う、というのは初めてのことだし、いくら対手が、やがては夫婦になると約束の出来ている清藤孫四郎だとはいえ、城内の侍に見つけられたら何うなるだろう、と思うと、身体が震えた。こういうことをしてはいけない、すぐにお奥へ戻らなければ、とあせりながら、そういう気持とは反対に、足はその場へ釘づけになったように動かず、石燈籠の蔭に身をひそめたまま、そわそわとあたりを見ていた。

戌の刻（午後八時）の太鼓が鳴ったらすぐ、能舞台の鏡の間のうしろにある庭の石燈籠の蔭まで来てくれ、と大廊下で昼間すれ違ったとき、孫四郎がささやいていったのだが、その孫四郎は、まだ姿を見せない。

五月の末の、あたたかい風の吹く晩で、月はないが星屑が、空一めんに拡がって光っている。

今日の昼、ここの能舞台で、出雲のお国の踊があった。いま伏見城にきている将軍家康は、七つになる孫娘の千姫を側に坐らせ、この城を預っている家康の次男、結城宰相秀康をはじめ、老中本多佐渡守正信以下の家来たちと共に、お国の踊を見物した。

はじめは出雲の大社の巫女であり、神楽舞から考案した歌舞伎踊でいま名代のお国の芸を、秀康はかねてから認め、天下一流の称を与えたほどなので、今日この伏見の城へお国を招いたのも、秀康の計らいに依ることであった。

その昼間の絢爛とした賑わいも、いまは夢のように失せて、星あかりだけが、能舞台の建物と広い庭を水色に煙らせ、しいんとして人影もない。

久美は、だんだん空おそろしくなり、その一方で、まだ姿も見せぬ孫四郎を待ち焦れる思いがつのり、なんだか自分が自分でないような気がしはじめてきた。

このころの十四歳といえば、もう嫁入りして子供を産んでいる女も多い。しかし久美は、五年前から千姫のお附として、今も伏見城の奥に奉公しているので、自分が男として感じるのは清藤孫四郎のほかにはいない。

久美の父は、家康の旗本で田辺治左衛門といったが、三年前の慶長五年、関ヶ原合戦のときに討死した。母は、久美が八歳のときに病いで世を去っている。家康の児小姓清藤孫四郎との夫婦約束は、久美の父が生きているとき、家康の許しを受けて決められたことだった。

「おそいこと、孫四郎さまは」

思わず、ふっと口に出してつぶやいてから、急に久美は真赤になり、誰も見ていない薄暗い石燈籠の蔭で、いそいで自分の頬を両手で押えた。

侍の屋敷はもちろん、こういう城の中では、侍たちの詰めている表と、女たちの住んでいる奥とは、ことに厳重に区別をされている。だから、めったに男と言葉を交したりすることはないのだが、家康は孫娘の顔を見たいので、この城にいる間は毎日、表御座所から千姫のいる奥の常御殿まで通ってくる。そのお供をするのは必ず小姓の清藤孫四郎なので、互いに話は出来ないでも、久美と孫四郎は、顔だけは見られるわけだった。

千姫のいる御殿の中でも、女の盛りをすぎて、自分の身体をもてあましている局や侍女が多い。そういう女たちが、面と向って久美を嫉妬半分で冷かすことが多いので、久美は迷惑しながらも、だんだん自分の中に、女を眼覚めさせられるようになっていた。

「おそいこと」

二度目につぶやいてから、今度は久美は、急に機嫌が悪くなった。

ひどく恥をかかされた気がし、これだけ待ったのだから、もう待っていなくてもいい、と思い、被衣を顔の半分まで引きさげ、石燈籠の蔭から歩き出そうとしたとき、眼に入ったのは能舞台から正面の、御成廊下の高縁の角から、ぽつりと現われた人影だった。

べつに、様子をはばかったり、あたりを見廻したりする風もない。星あかりに顔をむき出したまま、能舞台の正面のひろい庭を、堂々とした足どりで横切って、こちらへ近づいてくる。

まぎれもなく、清藤孫四郎であった。

孫四郎は、ことし十七歳になる。もう元服の時機はすぎているのだが、この慶長ごろの若い武士によくあるように、まだふさふさした前髪をし、残髪は茶筌に

結び、萌黄の天正裃、脇差をさした昼間と同じ姿で、そこに久美が待っているのを疑いもせぬ態度で、ずかずかと近よってきた。

久美は、わざと石燈籠の蔭にかくれたまま、じっとしていた。こんなに待たせた孫四郎を怒ってやろう、うんと焦らせてやろう、とひとりでに思いついたことだが、しかしそれは無駄であった。

近づいてくるなり孫四郎は、すぐに久美の被衣すがたを眼に入れ、人に聞かれるのをおそれる風でもなく、あたり前の声で、

「長いこと待ったか」

そういったのが、べつに済まなかった、という口ぶりでもなく、子供のようにひどく邪気がない。

「なんでございます。このようなところへ呼んで、ご用とは」

被衣をあげて、久美は、わざときびしい声で訊いた。

他人が見たら十四歳の久美が、十七歳の孫四郎を叱っているように思われるだろう。

黙って孫四郎は、一足近よってきた。

眉の太い、浅黒い孫四郎の顔に、星あかりが流れている。このころの武士の常で、十七といえばもう一人前で、身体つきも大きく、ことに孫四郎は背が高い。

主君の家康に従って、大坂、この伏見、京、それから江戸と供をして歩き、かぶき者といわれる武士の派手な装束を見慣れ、それにかぶれるせいか、こんど家康の供をして伏見へ帰ってきた孫四郎が、大へんおしゃれになり、身なりも華やかになっている、と女だけに、久美はすぐ気がついていた。

この城の奥でも、孫四郎は、女たちの間で評判がいい。男らしい、とか、りりしい殿御ぶり、とかいって、千姫づきの局や侍女たちは、わざと久美の前で賞めそやしたりする。

しかし孫四郎は、そういう女たちの噂には、全く無頓着であった。無頓着ついでに久美の存在も丸きり無視しているように見える、家康に従って、千姫の常御殿へくるときも、久美と顔を見合せながら、まるで感情のこもらないような眼をしている。それだけに久美は、そういう孫四郎を、憎い、と思ったり、薄情な、と怨んだり、女らしくひとりでやきもきすることがあった。

「久美どの」
正面から、星のあかりを受けた顔を、蔭になっている久美へまつすぐに向け、はじめて媚(あいきょう)する若者らしくもない、ひどく気むずかしい情のこわい眼つきをして、孫四郎は口を切った。
「おぬし、千姫様のお供をして、大坂城へ入ると聞いたが本当か」

星の約束

「はい」
その事だったのか、と久美は、いくらか張合抜けのしたような、その一方できゅっと身のしまるものを覚えながら、
「わたくしもお附として、おん供つかまつること、本多佐渡守様よりお言いつけがあったそうでございます」
「おぬしは行く気なのか、大坂へ」
「はい」
「主命だからか」
「千姫さまのおん供をしたいと存じまして」
「そうか」
ぎゅっと、孫四郎は唇をかんだ。
おぼろに青く見えるその顔に、怒りの色の奔ったのが、久美の眼にもわかる。
「大坂へ行くのか」
と孫四郎は、まっすぐに久美を見据えたまま、
「わかっているだろうな」
「なにをでございます」
「おれと、もう会えなくなるということを」
と、照れくさいのを我慢している、と久美にもわかる口ぶりで、外見(そとみ)は怒ったように、孫四郎はいった。
しばらくその顔を見あげていてから、ほほほ、と久美は思わず笑ってしまった。
「何がおかしい」
「お会い出来ぬなど、そんなことはありませぬ。この伏見と大坂とは、わずか十里、と聞いております。上様も、この後とも大坂城へおいでであそばすことでございましょうし、その時は、あなた様もおん供を」
「おぬしは、何も知らぬ」
久美が、はらはらするほど孫四郎は、大きな声を出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

した。
「大坂は、徳川家の領地ではない。大坂城は、豊臣家の城だ。この伏見の城のように、そう気軽にはゆかぬ」
「でも、あなた様にしても大坂へ参られることがありましょうし、わたくしもお城を出られぬ、と限ったことはござりますまい」
「やはり女だ、おぬしは」
と、溜息をつくように、孫四郎はいった。
「まだお小さい千姫様のお側に仕えているからだろう。おぬしは、ご政治向きのことは何も知らぬ。おれには、それが先のほうまで見えているのだ」
「どんなことをでございますか」
女だ、とか、何も知らぬ、とか頭からいわれたので、いささか反撥を感じて、久美は、むきになって訊き返した。
「それは言えぬ」
つぶやいてから、孫四郎は顔をそむけた。
一時に力が抜け落ちたように、孫四郎の肩のあたりが淋し気に見えた。
「いま言えることは、久美どの、これだけだ。よく聞いてくれ。千姫様は、いまだおん七歳。豊臣秀頼公は、おん十一歳。ご夫婦になられるとしても、一つ御殿に住みながら、ほんの仮のご夫婦にしかすぎぬ。おぬしは、一生、千姫様のお側にご奉公することになるのだぞ」
「一生」
急に、ほとばしるような声が、久美の口から出た。
ご奉公、ご奉公とは考えていても、一生、とまでは、まだ考えたこともない久美であった。きれいなお花畑の中を歩いていると思っているうちに、思いがけなく足元に、深い、底の知れぬほどの淵がのぞいているのに気がついた、というような心地がした。
「な、なぜ一生、ご奉公せねばなりませぬ」
「おぬしは、表向きのことを、何も聞かされてはおるまい。おれは知っている。この度のご縁組のこと、太閤殿下ご存生のころより決められていることでもあり、天下のおんためとは言いながら、まだ小さい千姫様が、お可哀そうだ。言いすぎかも知れぬが、敵城に人質となるも同じこと。これからのご生涯が、思いや

られる。お家から、おぬしが千姫様のおん供して行くとなれば、一生のご奉公、と覚悟せねばなるまい」
「一生のご奉公」
久美は、すうっと背筋から、冷たい風が吹き込むに似た心地がした。
「まさか、そのような」
「何年かご奉公をつとめ、お暇が下ると思うていたら、おぬしの考え違い、秀頼公のもとへ嫁ぐ本当の意味を、千姫様がご承知ないのと同じに、おぬしも、天下ご政治向きのことは、まだわかるまい。それが本当なのだが、しかし」
言いかけてから孫四郎は、久美がびっくりするくらい、きびしい顔を向けて、
「千姫様のおん供すること、よく考えておいてくれ。おぬしの気がすすまぬのなら、おれの力で出来るだけ、いかようにでも手をつくす」
「は、はい。でも」
「なぜおれが、こういうことをいうか、二つの意味がある。一つは、公の大きな意味だ。もう一つは、小さい、いや、おれにとっては大事な」
そこまでいって、孫四郎は言い淀んだ。いつの間にか、着物が触れ合うほど久美は、孫四郎に身を近づけて、
「小さな大事なこととは」
「うむ、それは」
そっと、こわいものに触るように、孫四郎は、久美の両肩に手をかけた。
「それはな」
「それは」
「おれと、おぬしのこと」
「わたくしと、あなたの」
「会うときはあっても、夫婦になれる機(おり)が来ぬようになったら」
「そんなことはございませぬ」
「久美、おれとそなたの事は、天下の事から言えば、取るに足らぬ小さなことなのだ。おぬしは女ゆえ、そこまでは考えまい。だが、おれにはわかる。世の中の、大きな流れに巻き込まれて、いつの間にか」
「いや、そんなことは、おっしゃらないで」
夢中で久美は、孫四郎の胸にとりすがっていた。孫

四郎の両手も、久美の、細い小さな身体を、しっかり抱いている。きれいな雲にでも包まれたような夢心地になり、それでいて久美は空おそろしくなり、がくがくと身体が震え、そのまま地面に崩れ落ちてしまいそうだった。

その久美を、孫四郎は強い力で抱きしめたまま、ぎごちない、しかし激しい言い方で、

「たとえ、たとえどのような事になろうとも、おれとそなたは一つだぞ。おれにとって、女というは、久美、そなたひとり。忘れてくれるな」

「はい、忘れませぬ、きっと」

震える声で、そういってから久美は、孫四郎の顔を見あげた。

「わたくしは、一生、大坂城にはおりませぬ。きっと、あなたのところへ帰りまする」

「うん、うん」

子供のように、孫四郎はうなずいた。

その孫四郎の顔の上に、きらきらと星の光が見える。久美の眼に、その星あかりが、いつかぼやけて、水に解けたように煙った。泪が、久美の頬を伝って流れた。

人の声が、急に孫四郎の耳へ入った。

はっと心づいて、孫四郎は、久美の身体から手を放し、一緒に石燈籠の蔭へ隠れた。灯あかりが近づいてくる。城中見廻りの士が三四人、能舞台の前の庭を通って、ゆっくりと天守閣のほうへ歩いていった。

「人に見咎められてはならぬ。おぬし、先へ行け。おれがうしろで、見とどけていてやる」

「は、はい」

「ここ数日が、おれとおぬしにとっては大事な時だぞ」

「そんなに」

また新しい恐怖がつきあげ、訊き返した久美を、孫四郎は押しやるようにした。

「さあ、早く行け」

「では」

会釈をして、久美は、能舞台の橋がかりの下を、星あかりをさえ切った物蔭をえらんで、小走りに急ぎ出した。

庭を横切り、御文庫の建物を廻ると、柴折戸を一つ

くぐっただけで、千姫の常御殿の庭へ入る。そこから、長局へ通じる渡廊下にあがりさえすればいいのだが、こういう経験は初めての久美には、薄氷の上を踏むに似た、足元が浮くようであった。

御文庫の建物の角を廻りかけ、ふり返って見ると、能舞台の庭のまん中に、孫四郎が立って、こちらを見送っている。大きく、孫四郎が、手を振ったのが見えた。

城中見廻りの侍の眼にとまったら、と思い、久美は、ひやりとしたが、孫四郎は、頓着していない様子だった。

なんという無鉄砲な、と思い、ふいに久美はおかしくなり、くすりと笑いがこみあげてきた。束の間の果敢ない逢瀬ではあったが、なんだか急に自分がおとなの女になったような気がして、

「わたくしのことを、子供だとおっしゃいますけれど、あなたも子供のように、向う見ずな真似をなさること」

ぼんやりと黒く、遠くに見える孫四郎の姿へ、声に出ない声で呼びかけておいて、くるりと身をひるがえした久美は、被衣を深くかぶり、常御殿の庭のほうへ走り出した。

手鞠会

受けとった　受けとった
大事のお鞠を　受けとった
蝶よ花よと　お育て申し
お返し申して　今宵から
小袖が三枚　重ね着三枚

局、侍女、女童などが、あわせて二十人ほど、両側にならんで坐り、一せいに唄いながら、片方の組から鞠を投げる。向い側の組のひとりがそれを受けとって、また投げ返す。そのうちに、だれかが鞠を受けとり損ね、手から落すと、その組の負になる。

これが、鎌倉のころから行われている手鞠会で、唄っている歌は、鎌倉のころのものとは違って、この慶長のころは、ずっと市井の生活に近くなり、俗っぽくなっている。

しかし、こういう鞠遊びのときは、かえって固苦しい唄よりも、不謹慎にならない程度で、肩の凝らないほうが雰囲気によく適い、かえって面白い。

伏見城の奥では、このころ手鞠会がはやっている。小さい千姫が、大へん手鞠遊びを面白がるからであった。

いまも、千姫の常御殿の広間で、局や侍女たちが、手鞠会をやっている。

ひとりが鞠を落すと、上段の間で、祖父の家康とならんで見物している千姫は、手を打ち、声を出して笑うのだった。

手鞠遊びよりも、その孫娘の千姫の様子を見て、家康も楽しそうに、にこにこ笑っている。

この慶長八年、二月十二日に、所も同じ伏見城で、朝廷から征夷大将軍に補され、右大臣に任ぜられた徳川家康は、ことし六十二歳であった。

二月からあと、この五月まで、家康は、伏見と京の間を二度往復しただけで、江戸にも下っていない。孫娘の千姫と、豊臣秀頼との婚儀が終るまでは、上方から離れられないためであった。

秀頼と千姫をめあわせることは、豊大閤秀吉が生前、秀吉のほうから言い出したことで、そのときは家康も、両家のためになることだと思い、よろこんで承諾をしたのだが、しかし今の情勢になってみると、いくらかためらう気持が家康にはある。

この時代に限ったことではなく、政略結婚というのは、ごく普通のようにして行われているし、家康も、なんべんもそれを経験してきている。

しかし、六十二歳になってみて、この結婚に天下を統べる大権が関係している、と考えると、さすがに家康も、そういうことは何もわからずに手鞠会を見物して喜んでいる無邪気な千姫を見ると、やはり胸の中が翳ってくる。

千姫は、家康の第三子の、いま江戸にいる秀忠の娘に当る。千姫の母は、秀忠の正室徳子の方であり、徳子は、大坂城にいる淀君の妹であった。淀君と徳子の母は、織田信長の妹で、幼名をお市といい、はじめ近江小谷の城主浅井長政に嫁して三女を生んだので、世に小谷の方といわれ、絶世の美人と伝えられる。その小谷の方は、兄の信長が夫の浅井長政を攻め滅してか

ら、三人の娘をつれて越前の柴田勝家のところへ再嫁した。それも天正十一年になって、豊臣秀吉が柴田勝家を攻めたとき、小谷の方も、夫の勝家と共に、城に火を放って死んだ。しかし、三人の娘は、落城前に城を脱出させられたが、その三女も、それぞれに戦国の世に生れた身分の高い女性らしい、数奇な運命をたどっている。

長女の茶々は、のちに秀吉に愛われ、側室となった。山城の淀の城に住んでいたところから淀君といわれ、文禄二年に秀吉の子を生んだ。これが、いまの秀頼であり、秀吉の歿後も、淀君は大坂城の実権を一手に握った形になっている。第二女は京極高次に嫁ぎ、三女の徳子は、初め豊臣秀勝の妻になったが、後に徳川秀忠のところに再嫁し、二十三歳のとき、江戸で千姫を生んだ。

亡き母の、美貌を天下にうたわれた小谷の方の血をひいて、淀君も徳子も、世にまれないとわれるほどの美人であった。

その徳子の娘だけに、ことし七歳の千姫は、祖父の家康でさえほれぼれするほどの美しさを具えている。

血筋が血筋だけに、わずか七歳でありながら、萬たけた美しさがあるのは自然だろうが、この孫娘が長じたらどのような美人になるだろうか、と考えるたび家康は、自分にあと十年の寿命がほしい、と、つくづく思う。溺愛といっていいほど、家康は千姫を可愛がり、三年前に江戸から千姫をこの伏見の城へ連れてきたのも、いつも自分の身近においておきたいからであった。

公式には、やがて秀頼のもとへ嫁ぐ千姫ゆえ、大坂に近い伏見の城で自分が養育する、という理由だが、その内実は下々の者と同じで、祖父が孫娘を可愛がる感情と全く変りはない。

千姫は、何も知らず、父や母のいる江戸をはなれ、祖父に連れられて伏見へ移り住んだ。

近いうち、大坂の内大臣秀頼のところへ嫁ぐのだ、と家康にいわれても、結婚というのが何ういうことなのか、まだ知る由もない千姫は、祖父と離れて暮すようになることが悲しく、そしてまた、母の姉、自分には伯母に当る淀の方というお人と同じお城に住める、と聞いて、なんとなく淀の方を懐しく思ったり、いく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com